

イソフタル酸の

Bhas 42 細胞を用いる形質転換試験（プロモーション試験）報告書

試験番号 7459

2015年3月17日

中央労働災害防止協会
日本バイオアッセイ研究センター

目 次

[項目]	[ページ]
標題	
試験目的	
GLP 対応	
試験委託者	
試験施設の名称及び所在地	
試験日程	
業務分担	
試資料の保管	
試験責任者の署名、捺印及び日付	
運営管理者及び試験責任者陳述書	
信頼性保証証明書	
本文	

標題

イソフタル酸の Bhas 42 細胞を用いる形質転換試験(プロモーション試験)

試験目的

イソフタル酸(被験物質番号 : 4310)の Bhas 42 細胞を用いる形質転換試験(プロモーション試験)を実施し、*in vitro*での発がんプロモーション作用を評価した。

GLP 対応

試験は、「労働安全衛生規則第 34 条の 3 第 2 項の規定に基づく試験施設等が具備すべき基準」(昭和 63 年 9 月 1 日労働省告示第 76 号、最終改正平成 12 年 12 月 25 日労働省告示第 120 号)に準拠して実施した。

試験委託者

厚生労働省 労働基準局 安全衛生部 化学物質対策課
東京都千代田区霞が関 1-2-2

試験施設の名称及び所在地

中央労働災害防止協会 日本バイオアッセイ研究センター

神奈川県秦野市平沢 2445 番地

電話 0463-82-3911

FAX 0463-82-3860

Bhas 42 細胞を用いる形質転換試験（プロモーション試験）報告書

試験番号 7459

本文

本文目次

[項目]	[ページ]
1. 要約	1
2. 試験材料	
2-1. 被験物質	2
2-2. 陽性対照	3
2-3. 陰性(溶媒)対照	4
2-4. 使用した細胞	4
3. 試験方法	
3-1. 採用した試験方法	5
3-2. 試験構成	5
3-3. プロモーション試験	5
3-4. 観察	6
3-5. 判定	7
4. 試験成績	
4-1. プロモーション試験	8
5. 結果の判定	9
6. 予見することができなかった試験の信頼性に影響を及ぼす疑いのある事態 及び試験計画書に従わなかったこと	9
7. 参考文献	9
試験結果 表 1、2	10
試験結果 図 1、2	12
写真 1	14

1. 要約

イソフタル酸の Bhas 42 細胞を用いる形質転換試験(プロモーション試験)を実施し、*in vitro*での発がんプロモーション作用を評価した。

形質転換試験の用量設定のための細胞増殖試験は、1.7 mg/ml (約 10mM) を最高用量とし、公比 2 で 8 段階の用量で実施した。その結果、陰性(溶媒)対照群に対する相対細胞増殖率は、0.11、0.21、0.43、0.85、1.7 mg/ml の用量でそれぞれ、96.4、85.5、88.9、69.0、71.3%であり、0.85 と 1.7 mg/ml の 2 用量で細胞増殖抑制作用を示した。また、0.85 と 1.7 mg/ml の 2 用量では、被験物質を培養液に添加した際に沈殿が認められ、かつ、被験物質培養液の色が黄色に変化して pH が低下したことを示した。細胞増殖試験の結果から、形質転換試験の用量は、1.7 mg/ml を最高用量とし、公比 2 で 6 段階の用量に設定した。

形質転換試験を実施した結果、ウェルあたりの平均形質転換巣数（形質転換率）は、0.11、0.21、0.43 mg/ml の用量でそれぞれ、13.5、16.8、17.8 であり、Dunnett 検定(有意水準 $\alpha=0.05$)で陰性(溶媒)対照群に対して有意差が認められた。かつ、0.11 から 0.43 mg/ml までの 3 用量の形質転換率は用量依存的な増加を示した。最高用量の 1.7 mg/ml では、ウェルの底面に一杯となる細胞生育状態（コンフルエント）となっておらず、細胞増殖抑制作用を示したと考えられた。また、陰性(溶媒)対照群に対する相対細胞増殖率は、0.053、0.11、0.21、0.43、0.85、1.7 mg/ml の用量でそれぞれ、94.9、90.4、94.4、92.2、72.2、51.1% であり、0.85 と 1.7 mg/ml の 2 用量で細胞増殖抑制作用を示した。0.85 と 1.7 mg/ml の 2 用量では、被験物質を培養液に添加した際に沈殿が認められ、かつ、被験物質培養液の色が黄色に変化して pH が低下したことを示した。

なお、試験成立の判定基準（被験物質処理群の統計処理対象群が 3 濃度以上、陰性(溶媒)対照群の形質転換率が 12 個/ウェル未満、陽性対照群の形質転換巣数が有意に高い）は、全て満たされていた。

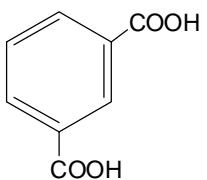
形質転換試験(プロモーション試験)において、0.11 から 0.43 mg/ml までの 3 用量の被験物質処理群における形質転換率は、陰性(溶媒)対照群に対して統計学的な有意差が認められ、かつ、用量依存的な増加を示した。また、試験成立の判定基準は全て満たされており、結果を評価できる試験が成立したと判断した。

以上の結果より、本被験物質の Bhas 42 細胞に対する *in vitro* での発がんプロモーション作用は陽性と判定した。

2. 試験材料

2-1. 被験物質(被験物質番号: 4310)

1) 被験物質の性質

化学物質の名称 (IUPAC 命名法による)	イソフタル酸				
別 名	1,3-ベンゼンジカルボン酸				
構造式又は示性式 (いずれも不明の場合は、その製法の概要)					
試験に供した 化学物質の純度	100.0%	試験に供した化学 物質のロット番号	PDH1049		
不純物の名称及び 濃度(含有率)	-				
C A S 番 号	121-91-5	蒸 気 圧	-		
分 子 量	166.13	分 配 係 数 (1-オタノール/水分配係数)	-		
融 点	341-343	常温における性状	白色の粉末		
沸 点	412 (760mmHg)				
安 定 性	水: - 光: - 熱: -				
溶媒に対する溶解度等	溶媒	溶解度	溶媒中の安定性	溶媒	溶解度
	水	0.1g/l(25)	-	DMSO*	340mg/ml以上
	エタノール	可溶	-	その他(アセト)	可溶
供 試 元	和光純薬工業株式会社				

* 日本バイオアッセイ研究センターの試験による。

2) 保管及び取り扱い

被験物質は、被験物質保管区域に室温、遮光にて保管した。被験物質の取り扱いは、黄色灯下で行った。

3) 被験物質の調製

使用溶媒

名称 : ジメチルスルホキシド(DMSO)
製造元 : 和光純薬工業(株)
ロット番号 : AWF1092
グレード : インフィニティピュア
純度 : 100.0%

溶媒選択の理由

被験物質は水に対して難溶であり、均一に分散することもできなかったが、DMSO に対して 340 mg/ml の濃度で溶解した。このため、DMSO を溶媒として選択した。

被験物質溶液の調製

被験物質を秤量し、DMSO を添加したものを最高調製溶液とした。これを DMSO で段階希釈して各被験物質溶液を調製した。調製作業は、黄色灯下で行った。被験物質溶液の調製は用時調製とした。

被験物質溶液の処理

必要量の培養液を 50 ml スピツツに取り、攪拌しながら被験物質の DMSO 溶液を添加(最終濃度 0.5%)した(被験物質培養液)。細胞への処理はプレートの培養液を抜き、ただちに被験物質培養液を添加することにより行った。処理作業は、黄色灯下で行った。

純度換算

被験物質の純度が 95%以上であるため、純度換算は実施しなかった。

2-2 . 陽性対照

1) 陽性対照物質

名称 : 12-O-テトラデカノイルフォルボール-13-アセテート(TPA)
ロット番号 : MKBQ9406V
純度 : 99%
製造元 : Sigma-Aldrich 社

2) 陽性対照物質の選択理由

TPA は Bhas 42 細胞を用いる形質転換試験にプロモーターとして広く使用されており、日本バイオアッセイ研究センターの背景データも豊富なため。

3) 陽性対照物質溶液の調製、保存について

所定の濃度の DMSO 溶液を調製、分注して、-30 以下で凍結保存し、調製後 1 年以内に用時解凍して用いた。凍結保存溶液は、使用直前に解凍して用いた。

使用溶媒： DMSO(和光純薬工業株、Lot No.: AWF1092、純度：100.0%)

最終濃度： 50 ng/ml

2-3 . 陰性(溶媒)対照

陰性(溶媒)対照として、DMSO を培養液に添加した。培地への添加液量は、0.5 vol%とした。

2-4 . 使用した細胞

1) 種類

Bhas 42(マウス全胎児由来 BALB/c 3T3 A31-1-1 に v-Ha-ras 遺伝子を導入した細胞)¹⁾

2) 供給源

一般財団法人 食品薬品安全センターより入手(2008 年 11 月 13 日、入手時 17 代)

3) 保存条件

液体窒素中で保存(18 代)

4) 培養条件

ウシ胎児血清(FBS、ロット番号：S11605S1780、Biowest 製)を 5 vol%、ペニシリンを 50 U/ml、ストレプトマイシン 50 µg/ml を含む Dulbecco's modified Eagle's medium/ Ham's F12 (DF5F、Life Technologies)を用い、37 ℃、5%CO₂ の条件下で培養した。

5) 特性

接触阻止能を維持している。マイコプラズマの汚染は無い。

6) 選択理由

形質転換試験に常用されている²⁻⁵⁾。

7) 使用条件

凍結保存した細胞(18 代)を解凍して、細胞増殖試験では解凍してから継代数 10 代以内の細胞を用いた。形質転換試験では解凍してから継代数 3 代以内の細胞を用いた。

3. 試験方法

3-1. 採用した試験方法

「BHAS 42 細胞を用いる形質転換試験による調査の基準」(平成 26 年 7 月 4 日、厚生労働省第 3 回遺伝毒性評価ワーキンググループ合意事項)に準拠して実施した。

3-2. 試験構成

初めに形質転換試験の濃度設定のために細胞増殖試験を実施したのちに、形質転換試験を実施した。形質転換試験はプロモーション試験のみ実施した。

3-3. プロモーション試験

3-3-1. 用量設定のための細胞増殖試験

細胞増殖試験は、各用量 3 ウェルを用いて実施した。細胞増殖試験は 1.7 mg/ml(約 10 mM)を最高用量とし、公比 2 で 8 段階の用量で実施した。細胞増殖試験の対照として陰性(溶媒)対照及びプランクを設けた。

実験方法

細胞は 0.25% トリプシンを用いて剥離した後、細胞濃度 0.7×10^4 個/ml の懸濁液とした。この細胞懸濁液 2 ml(1.4×10^4 個)を 6 ウェルプレートに分注(3 ウェル/群)した。播種 4 日後に培地を被験物質または溶媒を含む培地 2ml と交換した。播種 7 日後に 10% ホルマリンで固定し、水洗、乾燥して 0.1% クリスタルバイオレット溶液で染色した。乾燥後、2.0 ml の色素抽出液(50% エタノール及び 0.02 N 塩酸を含む)でクリスタルバイオレットを抽出後、0.1 ml を 96 ウェルプレートに移し、550 nm における吸光度をマイクロプレートリーダーで測定した。次の式により各処理群での相対細胞増殖率(%)を求めた。

$$X(\%) = (T - B)/(S - B) \times 100$$

X : 被験物質処理群の相対細胞増殖率(%)

S : 陰性(溶媒)対照群の吸光度

T : 被験物質群の吸光度

B : プランクの吸光度(培地のみを入れたウェル)

3-3-2 . 形質転換試験

形質転換試験は、形質転換用に各用量 6 ウェル、細胞増殖率測定用に 3 ウェルを用いて実施した。用量設定のための細胞増殖試験の結果に基づき、形質転換試験は 1.7 mg/ml(約 10 mM)を最高用量とし、公比 2 で 6 段階の用量で実施した。形質転換試験の対照として陰性(溶媒)対照及び陽性対照を設けた。なお、TPA の培地における溶媒(DMSO)濃度は 0.5 vol%とした。

実験方法

細胞は 0.25% トリプシンを用いて剥離した後、細胞濃度 0.7×10^4 個/ml の懸濁液とした。この細胞懸濁液 2 ml(1.4×10^4 個)を 6 ウェルプレートに分注し、それぞれ形質転換試験(6 ウェル/群)及び細胞増殖試験(3 ウェル/群)用とした。播種 4 日後に培地を被験物質または溶媒を含む培地と交換した。形質転換試験用の細胞は、播種 7 日後、播種 11 日後に培地を被験物質または陰性(溶媒)対照物質を含む培地と交換し、播種 14 日後に新鮮培地に交換した。細胞播種 21 日後にエタノールで固定した後、5 vol% ギムザ液で染色し、各ウェルの形質転換巣を数えた。細胞増殖試験用の細胞は、播種 7 日後 10% ホルマリンで固定後、細胞増殖試験と同様の操作を行った。

3-4 . 観察

1) 形質転換巣観察

実体顕微鏡を用いて細胞を観察し、次の基準により形質転換巣であると判定したものについて、その数を数えた。なお、プレートをコード化し、処理条件が判らない状況で観察した。

形質転換巣の大きさが 2 mm 以上のもの。

紡錘形をしている(spindle-shaped)。

細胞質が塩基性(濃い紫色)に強く染まっている(basophilic)。

ランダムな配列で互いに交差している(criss-cross)。

積み重なりっている(piling-up)。

周辺部の単層の細胞へ浸潤している(invasive)。

- の所見が全部揃わなくても、一部著しければ形質転換巣と判定した。

形質転換巣の数は、それぞれのウェルごとに記録した。

2) 結果の表示

相対細胞増殖率(%)

ウェルごとの形質転換巣の数

ウェルあたりの平均形質転換巣の数（形質転換率）

3-5 . 判定

1) 統計処理対照群

以下に示す基準を満たした群について統計処理を行った。

細胞増殖試験用のプレートでは 2 ウェル以上が測定可能である。

形質転換本試験用のプレートでは 4 ウェル以上が計数可能である。

被験物質群の相対細胞増殖率が 20% を超えている。

2) 結果の解析

各被験物質処理群と陰性(溶媒)対照群間において Dunnett 検定を行った(有意水準 $\alpha=0.05$ 、片側)。また、陽性対照群と陰性(溶媒)対照群間において Student の t 検定を行った(有意水準 $\alpha=0.05$ 、片側)。

3) 試験成立の判定

以下の基準が全て満たされた場合、結果を評価できる試験が成立したと考えた。

被験物質処理群において統計処理対象群が 3 濃度以上ある。

陰性(溶媒)対照群の形質転換率が 12 個/ウェルを越えていない。

陽性対照群の形質転換巣数が有意に高い。

4) 結果の判定

3)の「試験成立の判定」により試験が成立した場合、被験物質群の統計処理を実施した群において、以下の基準によって結果を判定した。

陰性：形質転換率の統計学的に有意な増加が、全ての群で認められない。

陽性：形質転換率の統計学的に有意な増加が、2 濃度以上で認められ、かつ濃度依存性を示す。

疑陽性：形質転換率の統計学的に有意な増加が、1 濃度で認められる。

最終的な判定は、統計学的検定、背景データ、形質転換巣の誘発率を考慮し、生物学的な観点からの判断を加味して総合的に評価した。

4. 試験成績

4-1. プロモーション試験

4-1-1. 用量設定のための細胞増殖試験

細胞増殖試験の結果を表1と図1に示した。細胞増殖試験は1.7 mg/ml(約10 mM)を最高用量とし、公比2で8段階の用量で実施した。その結果、陰性(溶媒)対照群に対する相対細胞増殖率は、0.11、0.21、0.43、0.85、1.7 mg/mlの用量でそれぞれ、96.4、85.5、88.9、69.0、71.3%であり、0.85と1.7 mg/mlの2用量で細胞増殖抑制作用を示した。また、0.85と1.7 mg/mlの2用量では、被験物質を培養液に添加した際に沈殿が認められ、かつ、被験物質培養液の色が黄色に変化してpHが低下したことを示した。

従って、形質転換試験の用量は、1.7 mg/mlを最高用量とし、公比2、6用量に設定した。

4-1-2. 形質転換試験

形質転換試験の結果を表2と図2に示した。形質転換試験は1.7 mg/ml(約10 mM)を最高用量とし、公比2で6段階の用量で実施した。試験の結果、ウェルあたりの平均形質転換巣数(形質転換率)は、0.11、0.21、0.43 mg/mlの用量でそれぞれ、13.5、16.8、17.8であり、Dunnett検定(有意水準 $\alpha=0.05$)で陰性(溶媒)対照群に対して有意差が認められた。かつ、0.11から0.43 mg/mlまでの3用量の形質転換率は用量依存的な増加を示した。最高用量の1.7 mg/mlでは、細胞増殖抑制作用により、ウェルの底面に一杯となる細胞生育状態(コンフルエント)とならなかった。また、陰性(溶媒)対照群に対する相対細胞増殖率は、0.053、0.11、0.21、0.43、0.85、1.7 mg/mlの用量でそれぞれ、94.9、90.4、94.4、92.2、72.2、51.1%であり、0.85と1.7 mg/mlの2用量で細胞増殖抑制作用を示した。0.85と1.7 mg/mlの2用量では、被験物質を培養液に添加した際に沈殿が認められ、かつ、被験物質培養液の色が黄色に変化してpHが低下したことを示した。

なお、試験成立の判定基準(被験物質処理群の統計処理対象群が3濃度以上、陰性(溶媒)対照群の形質転換率が12個/ウェル未満、陽性対照群の形質転換巣数が有意に高い)は、全て満たされていた。

5. 結果の判定

形質転換試験(プロモーション試験)において、0.11 から 0.43 mg/ml までの 3 用量の被験物質処理群における形質転換率は、陰性(溶媒)対照群に対して統計学的な有意差が認められ、かつ、用量依存的な増加を示した。また、試験成立の判定基準は全て満たされており、結果を評価できる試験が成立したと判断した。

以上の結果より、本被験物質の Bhas 42 細胞に対する *in vitro* での発がんプロモーション作用は陽性と判定した。判定が陽性となったため、陰性(溶媒)対照群、被験物質処理群、陽性対照群のプレートから代表的なウェルを選び、写真 1 に示した。

6. 予見することができなかった試験の信頼性に影響を及ぼす疑いのある事態及び試験計画書に従わなかったこと

予見することができなかった試験の信頼性に影響を及ぼす疑いのある事態は発生しなかった。また、試験計画書に従わない事態は発生しなかった。

7. 参考文献

- 1) Sasaki, K. et al.: Isolation and characterization of ras-transfected BALB/3T3 clone showing morphological transformation by 12-O-tetradecanoyl-phorbol-13-acetate, Jpn. J. Cancer Res. 79 (1988) 921-930.
- 2) Ohmori, K. et al.: An assay method for the prediction of tumor promoting potential of chemicals by the use of Bhas 42 cells, Mutation Res. 557 (2004) 191-202.
- 3) Ohmori, K. et al.: An inter-laboratory collaborative study by the non-genotoxic carcinogen study group in Japan, on a cell transformation assay for tumor promoters using Bhas 42 cells, Altern. Lab. Animal 33 (2005) 619-639.
- 4) Sakai, A. et al.: A Bhas 42 cell transformation assay on 98 chemicals: the characteristics and performance for the prediction of chemical carcinogenicity, Mutation Res. 702 (2010) 100 - 122.
- 5) Sakai, A. et al.: An international validation study of a Bhas 42 cell transformation assay for the prediction of chemical carcinogenicity, Mutation Res. 725 (2011) 57 - 77.

表1 イソフタル酸の細胞増殖試験（プロモーション試験）結果

用 量 (mg/ml)	吸光度の平均値 ^{a)}	相対細胞増殖率 ^{b)} (% of control)
0	0.449	100
0.013	0.422	94.0
0.027	0.422	94.0
0.053	0.413	92.0
0.11	0.433	96.4
0.21	0.384	85.5
0.43	0.399	88.9
0.85 †	0.310	69.0
1.7 †	0.320	71.3

a) 各群の吸光度の平均からブランクの吸光度の平均を引いた数値を示した

b) 陰性(溶媒)対照群の吸光度に対する各処理群の吸光度のパーセンテージを示した

† 被験物質を培養液に添加した際に沈殿を生じ、かつ、培養液の色が黄色に変化した用量

表2 イソフタル酸の形質転換試験（プロモーション試験）結果

用 量 (mg/ml)	形 質 転 換 巢 数								相対細胞増殖率 ^{b)} (% of control)
	Well 1	Well 2	Well 3	Well 4	Well 5	Well 6	平均値 ^{a)}	SD	
0 (0.5% DMSO)	9	8	8	9	10	12	9.3	1.5	100
0.053	10	9	10	14	6	9	9.7	2.6	94.9
0.11	13	12	17	13	12	14	13.5 [*]	1.9	90.4
0.21	14	17	15	17	20	18	16.8 [*]	2.1	94.4
0.43	20	17	17	14	20	19	17.8 [*]	2.3	92.2
0.85 †	12	10	12	17	10	10	11.8	2.7	72.2
1.7 †	Tox	Tox	Tox	Tox	Tox	Tox			51.1
TPA (50 ng/ml)	19	23	18	18	17	21	19.3 [#]	2.3	148

a) 結果の解析として、被験物質処理群ではDunnett検定、陽性対照のTPA処理群ではStudentのt検定を実施した
Dunnett検定(有意水準 $\alpha=0.05$ 、片側)：陰性(溶媒)対照群に対して有意差を示した平均値の右側に*を付した
Studentのt検定(有意水準 $\alpha=0.05$ 、片側)：陰性(溶媒)対照群に対して有意差を示した平均値の右側に#を付した

b) 陰性(溶媒)対照群の吸光度に対する各処理群の吸光度のパーセンテージを示した。

Tox : コンフルエントとならなかったウェル

† : 被験物質を培養液に添加した際に沈殿を生じ、かつ、培養液の色が黄色に変化した用量

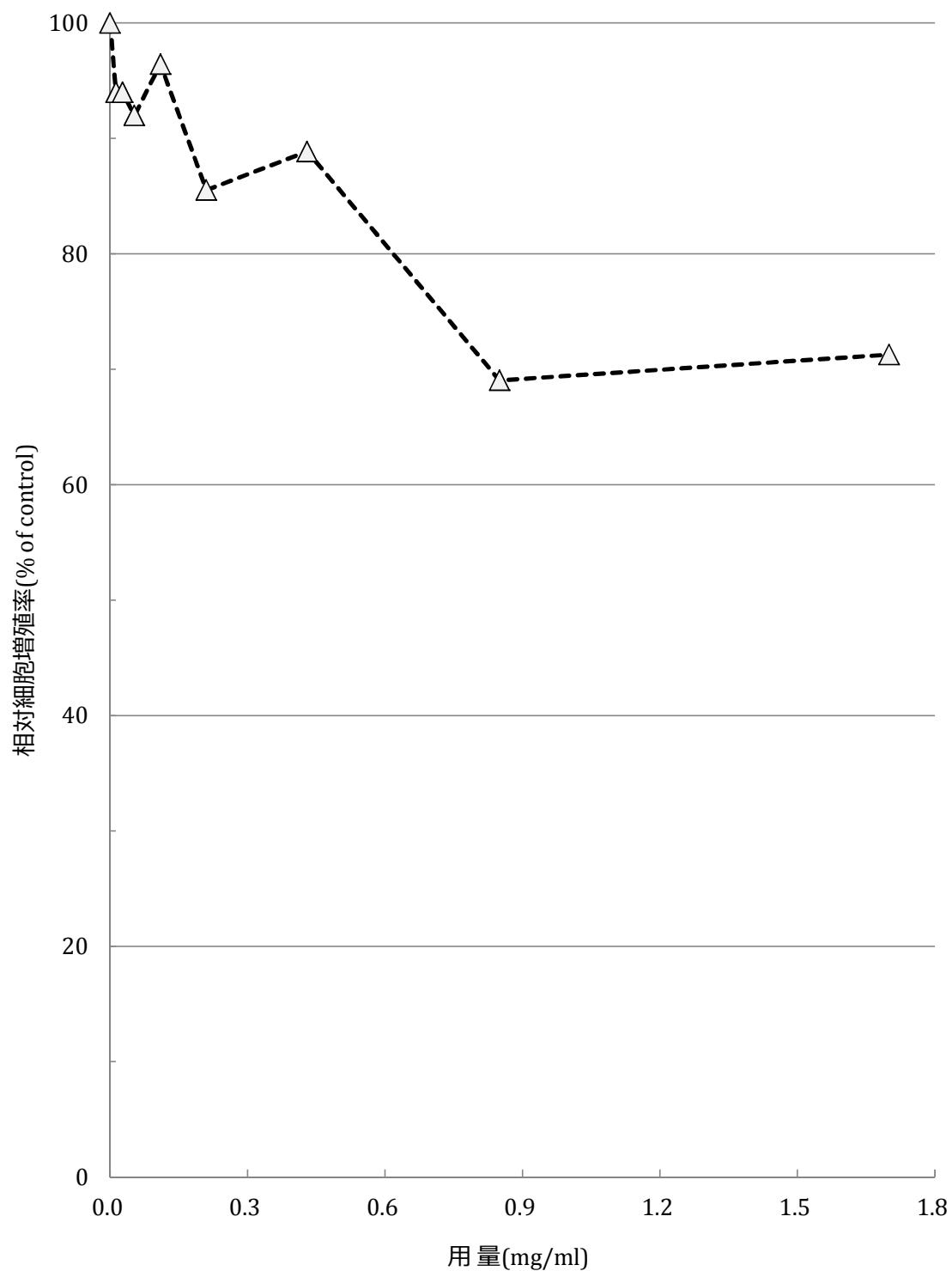


図1 イソフタル酸の細胞増殖試験（プロモーション試験）結果

注) 0.85 mg/ml以上の用量では、被験物質処理時に沈殿を生じ、培養液の色が黄色に変化した

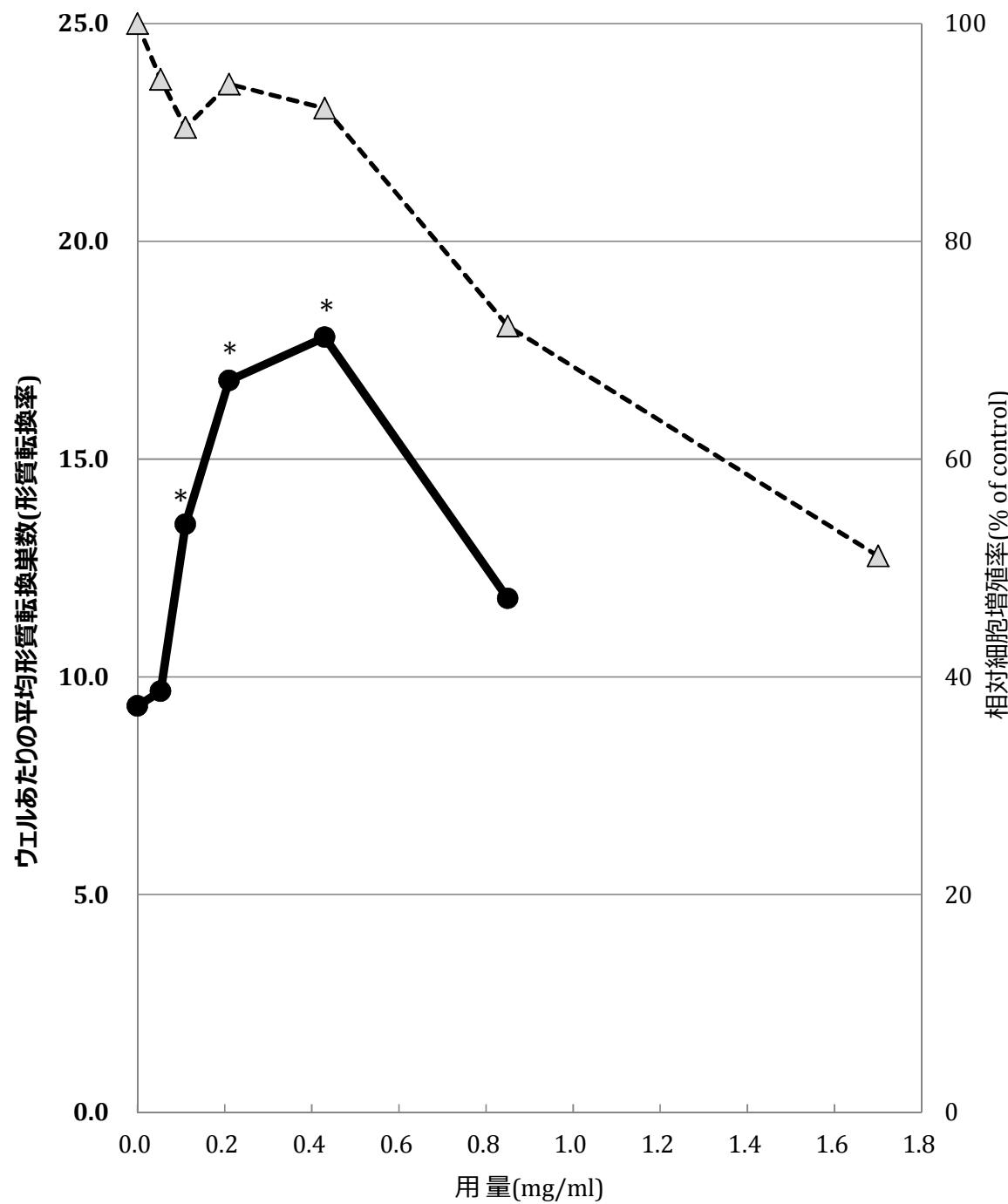


図2 イソフタル酸の形質転換試験（プロモーション試験）結果
 ●—● 形質転換率 -△- 相対細胞増殖率

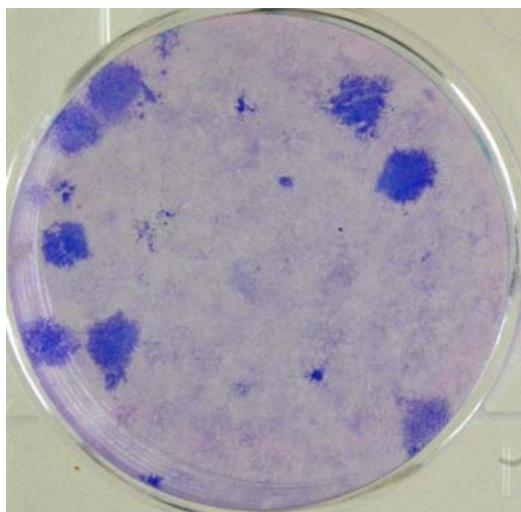
* : $p < 0.05$ (Dunnett)

注) 0.85 mg/ml以上の用量では、被験物質処理時に沈殿を生じ、培養液の色が黄色に変化した。また、1.7 mg/mlの用量では、細胞はコンフルエントとならなかった

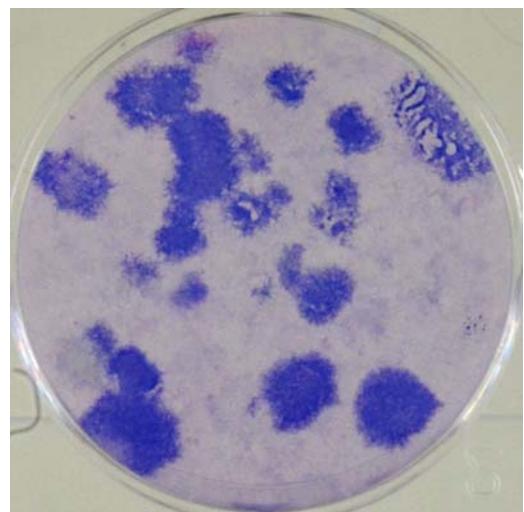
写真 1

被験物質名： イソフタル酸

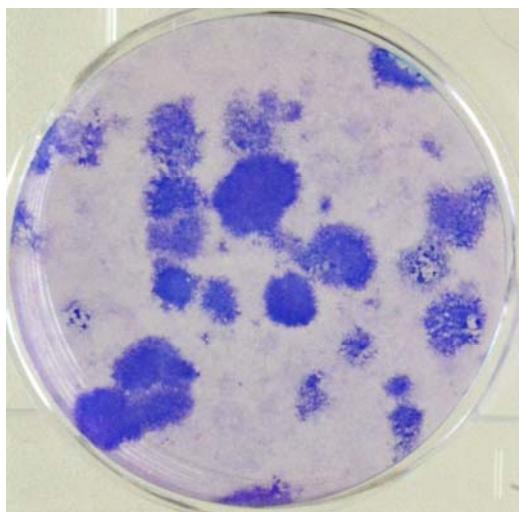
【陰性(溶媒)対照群】



【イソフタル酸 0.21 mg/ml 処理群】



【イソフタル酸 0.43 mg/ml 処理群】



【TPA 50ng/ml 処理群】

